
ようこそ！ライフ・ウェポンへ

タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ようこそ！ライフ・ウェポンへ

【Nコード】

N8397B

【作者名】

タロウ

【あらすじ】

季節は冬仕事もしないで暇な日常をすごしている二人がたまたま見つけてチラシに書かれていたのは武器屋の店員の募集チラシだった。興味を引かれそこに行ってみると

第一話：5人集まる（前書き）

小説を書くのは初めてですが読んでくれると嬉しいです。

第一話..5人集まる

「うわー！もうすっかり冬だなー」つめたい風が体にガンガン吹き付けてくる。ハーッ俺

の心もいまは冬みたく寒いなー

「んだよアニーそんな辛気くせー顔しちゃって」とジンは俺にきいてくる

「なあ俺等いつもこんなことしてていいいんかな。もう15歳にもなっただぜ。もったこ

うなんか熱く燃える様なことしないかフツー」

「はあ？なに言ってンだよ。そんなん適当に過ごしてたらいつのまにかなってるって」

学校は14で卒業してもう仕事を始めてるはずなのに俺等は仕事もせずにこう暇に過ごし

てるわけだ・・・ニートってことだ・・・

「なあ俺ら仕事探さないか？」耐えきれず言ってみたら

「しごとねー」興味なさそうにジンは答えてきた

「まあ腹減ったし店にくいに行かないか？」こっこいつは・・・人の話もきかないで

俺たちの住んでる町はレンドといって周りをドラゴンやモンスターが入ってこないように

城壁で守られているのどかな町なんだが最近はいろいろ開発されていてだんだんにぎやか

になってきている。

うえの学校に行くには金が結構かかるし友達なんかはもう自分で仕事をみつけたりしてい

る。俺このままで大丈夫かなーやりたいことも見つからないし将来が不安だ……

＊

飯を食べ終わって店をでると風が強く吹いてきて顔に何かがあたった 「なんだよこれ」

みてみるとバイトの募集のチラシだった少し読んでみると鳥肌がたった

チラシにはこう書かれていた

『

レンド二番街道に武器屋【ライフ・ウェポン】が開店しようと思ひ店員を募集

しています。

店で仕事をしていれば今まで気づかなかった得意なことを発見したり様々な人

と触れ合うことで新しい出会い自分の夢との出会いが見つかる最高のステップ

です。

まずは店に一步はいる勇氣をもって店内へお越し下さい。

＊誠にすいませんが18歳以上の方募集しておりません御了承下さい

ライフ・ウエポンオ

ーナー【サンタ】

』

こっこれはなんて運命的なんだ顔にたまたまかかったチラシがこんなにも俺の探し求めて

いたものだったなんて

「ジン！ここにいくぞ！」 「へ？」 状況のわからないジンを無理矢理つれて地図が書い

てあった場所へ向けて走っていった。

その店は木製で西部の酒場を思わせるような形でペンキで白く塗られていた。

「おいこの店はいんのか？まだ開店もしていねーじゃねえか。」

「いいんだよここで。」

ドアをひらいて中へ入ると中に少し小太りなじいさんと小さな男子1人と女子が二人いた

「ふおふおこれでちょうど5人そろったのお。よかったのおぬしら二人でラストだったわ

い。わしがオーナーの サンタじやい 他の店員との自己紹介等はまたあとでやっておい

てくれ。」

「はっはい。」すこし動揺しながらもなんとか返事をしといた

「おいアニーどういうことだ？」 「俺等はここで働くんだよ」 「はあ？うーん武器屋か結

構あこがれてたんだよなー。武器ってカッコイーし。うんうん良いぜここで働くの」

もっと抵抗があると思ってたんだがまあいいや。

「まず言っておかなければならないことがあるんじやが。わしはこの店をあけることが多い

いのじやがその間は主等5人でなんとかやっておくれな。もうけたお金もわしはいらん5

人でかってにわけてくれ。それと」

「まっまじかよ！それじやあじいさんはどうやってすごすんだよ。」いきなりジンが声を

あげた。まあ確かに俺もジンと同じことをおもったしな

「まあ話は最後までききなさいな。わしはたまに依頼を受けることがあるんじやがそれを

店員としてのもう一つの仕事でやってもらう。これで分かるかな・・その報酬でわしはば

ちばちと生きるわけじや。」

依頼っていうと俺はドラゴン退治などを思いうかべてしまう。なんか不安だなー・・・

「ふおおおおおなめに危険な依頼そうそうは受けんし出てくる報酬も小さなものばかりじや。

お主等の思ってるのはドラゴン退治とかそーゆーもんじやろうがそんなの頼むわけなかる

う。主等には無理じゃしな。」

うーん安心したけどいったいどんな依頼を受けて来るのか。

「例えばどんな依頼を受けてくるの？」言ったのはまだ名前もしらない赤髪の女子だった

「そうじゃの例えば、おつかい や 危険のものじゃと火陰洞窟に
いって鉱物をとってき

もらうくらいじゃ。」

火陰洞窟とはレンドの西に半日ほど歩いていったところにある洞窟で
ハンターの試験のとき

などに使う洞窟だ。まあモンスターもいるから少しは危険なんだろう。
う。

「うんまあそんなくらいは何ともないけど。」赤髪の女子は言った

「他の者もよいかな。」5人全員がうなずいた

「簡単なハンター用の中級剣や斧など武器はだいたいそろっておる
明日からでも初めてと

いてくれ。わしは明日からはたまにしかいかんからな。」

うーんなんか自分勝手な気もするがいいか。

「じゃあわしはもう帰るかの・・・そうじゃ、リーわかっておるな

？」

「分かってますよ。大丈夫ですよ」

リーと呼ばれた茶髪で背の小さい男子が答えている。二人の会話はわからにけどまあいい

か。サンタさんは気づくともういなくなってる以外とテキパキと動くんだな。

「じゃあまずは自己紹介でもしよっか。まずはあたしだけど名前はカリアこの辺じゃ赤毛

は珍しいでしょ。私はやるからにはとことんやるわよ。レンド一の武器屋にするの。いい

ね」みた目通りみんなを引っ張っていくだろうな。

「じゃあ次私ね。」ずっと黙ってた女子が口を開いた。てっきり何にもしゃべんない無口

なキャラかと思ってたけどそうじゃないみたいだ。

「私ふだんはのんびりとしているんだけど燃えるとなんか性格が少し変わるけどきにしな

いでね。実は武器には前から興味あったのカッコイーんだよね。はあー自分の武器もち

たいー」そんな似合わないことをいったのに反応したのがジンだった

「分かる！分かるぞその気持ち武器屋やるんだから自分専用の武器とかもほしいよな」

「そう自分専用の武器ほしー」なんだこの二人は意気投合しちゃって以外と似合うカ

ツプルかもななんて考えていると

「自分専用の武器が欲しいなら俺が作りましょうか？俺これでも一応鍛冶屋ですから。」

言ったのはあの茶髪のチビだった。こいつ鍛冶屋なのか？ありえねー

「うんお願い。君が天才鍛冶屋だってことしってわざとってたの。」

おいおいなにいつてんだこのチビが天才？

「しっててわざと言っててるのも分かってましたけど。てかさーゆーわざと遠回しにいつて

くるのいらつきますからやめてくれませんか？」

なんか早速やな雰囲気・・・予想通りこのあと俺まで巻き込んだの口げんかが始まった

*

「なかなかずぶとい神経してるじゃねえか。ハアハア・・気に入ったぜ」ジンが言った

「そりゃどうも。ハアハア・・」 「なんであたしたちまでまき・・ハア・・こむのよ」

一気に疲労ががたまった・・まあ仲がよくなった？から結果オーライかな。

「名前をリーといいます。一応鍛冶の腕はいいと自分でも思ってます。みなさんにはそれ

ぞれ専用の武器をつくってあげますよ」 「よっしゃー」 もちろん言ったのはジンだった

「ところでサンタさんになんか言われていたけどなにをいわれたんだ」

「あああれは他のハンター用の武器を作るようあんた等が来る前にいわれてたんすよ」

「へー本当におめーすげんだな」 「べ・・べつにそれほどじゃ」 照れてるところは結構か

わいいんだよな。俺とジンの自己紹介も終わった。

「みんな明日からこの店ライフ・ウェポンは開店よ張り切っていくのよ」

「おう！」 みんなが大きくうなづく。

＊

「いらっしゃいませー本日オープンしましたライフ・ウェポンです。」

外から大きく聞こえてくる声はカリアの声で店の中で俺たちは待機している。

開店第一号のお客様はいったいどんな人だろうか。ぎいっと扉がなり上についてるベルが

ちりりんと鳴った。きたお客様第一号だ！

【第一話終わり】

第一話：5人集まる（後書き）

今年は一応受験なので続きを出すのが遅くなる可能性があります
御了承ください。

2話：出発（前書き）

2話です

2話：出発

「ちりりん」扉についでる鈴が鳴り第一号の客がはいってきた。

「いらっしやいませー!!」俺等は大声で一斉にいった

はいってつきた男はレンジャーやハンターなどを思わせる革製の服をきて結構体格のいい男だ

った

「うお！なにもしかして俺客第一号か？」すこしびっくりしながらも武器をみていく

「うーんなあ双剣ってのわかるか？あれ探してるんだがなにかないか？」そ・・双剣？

うーん聞いたことないしな。昨日武器を一応全部確認したけどそれらしいのはなかったしな

↓

「それなら表には出してませんよ。それをほしがる人はそういないと思ったので奥にあります

から今取ってきます。」そういったのはリーだった

まあリーは一応天才鍛冶屋らしいから知ってるんだろうな

「しかし店員は子供だけなのか？」

「あっはい。でも店長は老人です」

「なんかめずらしい組み合わせだな」まあお客さんと同じく俺もおもってんだけよな

そう話しているとリーが奥の部屋から出てきた

「いま置いてあるのはこれだけなんです。」「そうやって出したのは小振りな二本の剣だった

「おおなかなかいいじゃねえか。いくらだ」 「それは4万でいいですか？」

「まあ妥当な値段だな。俺的にはもう少しいいっても良いと思ったんだが。」

「まあお客様第一号ですしそれ俺が作ったやつツスから。」

「おいおい・・・まさかお前あのリーってやつじゃねえか？」

おいーリーの事してんのか。

「そうっすけど。」

「おお。これを作るのもわかるな。しかしまさか武器屋で働いてるとは思ってなかったぜ。」

また寄らせてもらうかな」

おおりーの剣が売れた。まさかほんとにすごいとは思ってなかったけど。

「まいど〜。」男は店を出ていった。

「りーお前ほんとにすごいんだな。俺たち専用の武器マジで作ってくれ〜」ジンが目を輝かせ

ながらりーに迫っていく。

「うう・・・作る、作りますからこっちに迫ってこないでー!!」りーがたじろぐ

ジンがやめるとりーは冷静にもどり後でどんなのを作るかいつてくれと言って奥の部屋に引き

こもった。まああんなのに迫られたらみんなあーなるかもな・・・

＊

「今日の収穫は〜りーの作った双剣が5万で売れて、バトルアックス2本で6万か。開店オー

ブンだからもっと売れると思ったんだけどねー。」カリアが計算してみんなに伝える。まあ

そんな計算するほど売れていないけど。

「うちの武器はある程度の剣や槍が質がわるいんすよ」

「そうなの？」ノルンがきいてきた。

「はい。すこし刃こぼれしていろいろあります。」それで客の入りと売り上げが釣り合わな

かったのか

「じゃありーにできるだけ武器をつくってもらえない？」カリアが提案した

「作ろうとしても材料には限界ありますし、材料を手に入れる金もそんなありませんよ。」

「じゃあ鉱山いって手に入れるしかないな」これを言ったのはジンだった。

「そうっすね。質のいい材料はあるていどありますから、それでジンさんたちの専用武器を

作りますからそれを持って行って下さい。」鉱山に出かけるのに武器を持っていくのはここか

ら近いのは火陰洞窟か長陽山だがどちらもモンスターがいるのだ。

「待ってましたーその言葉！」もちろん言ったのはジン。

「でもできるのには時間かかるし今は店に置いてあるのをもっていきましょ」

そうだよなすぐにできるわけじゃないしな。

「みなさんが行ってる間につくつときますからどんなのか言ってください。」

みんなそれぞれの欲しい武器をいった

「アニーはどうすんの？」 「ん？ ああ俺ね」

うーん俺に合う武器かどんなのがいいかな。いろいろ試して合ったのを見つけようかな

「俺は別にすぐ欲しいわけじゃないから後で決めるよ」 「そうすか」
リーが即答で答えた

「じゃあみんな武器をそれぞれもって」

俺は普通の中級剣と短剣、それに簡単な槍をもった。斧も持とうと思ったが無理だとおもって

諦めた。ジンはほかでけえ大剣「たしかバスターソードだったかな」を背中にかけていた

カリアは長めの槍をもっている。ノルンはボウガンだった。

「火陰洞窟と長陽山だけどどちかつうと火陰洞窟の方が近いしこっちにいきましょう。」

とうゆうことで初めての洞窟に俺は緊張しながらもワクワクしながら火陰洞窟に向かった！

2話：出発（後書き）

次回は戦闘シーンを入れたと思います

3話：いざ火陰洞窟（前書き）

店の品が悪く武器を新しくつくるため材料を取りに火陰洞窟へいった3人の前にモンスターが現れ・・・

今回は戦闘シーンを入れました

3話…いざ火陰洞窟

朝3時レンドをでて約半日歩いた頃ようやく火陰洞窟が見えてきた
最初はノルンも来るはずだったんだけどリーが武器をつくって俺たち
が洞窟で探索にいつてる

間だれが店番のやるのか決めた結果ノルンが残る事に。本人は武器
を持ちたがっていたけど

最初に使う武器は自分専用の武器がいいと思い始めて自分から残る
ように言ってきた

火陰洞窟の入り口までくると

ジンがぐちを言い始めた

「ここに来るだけでこんな時間かかるなんて・・・1日じゃおわら
ねーよー」

「まあ取れるだけ取ってかえればいいじゃんか」

といいつつも入り口の床でみんな休憩・・・

30分後カリアが「よし飯も食ったし洞窟へいきましょ！」カリア
に続いて俺たちは洞窟へは

いっていく。

中はかなり暗く冷たい空気が張りつめている

「かーなんかダンジョンって感じだよなー」 俺が言うとジンも

「うんうんでも俺は速く武器をつかいたいぜ」と浮かれて言っている

地図を道具屋で事前に用意し買ってきたのを見る限りでは後1時間ほど降りたところに良く

鉱物がでるところがあるらしい。

とぼとぼ歩いていると地面に赤色にぴかぴかひかる物をみつけた。

拾ってみると表面がつるつるとしている。

「なあこれ何かな」 みんなに聞いてると何かうなり声が聞こえてきた

いつの間にかモンスターに囲まれていた ブランウルフだ火陰

洞窟で出てくるモンスター

では有名だ

「早速戦闘だー！」 なぜかここではしゃぐジンここは普通おそってくるのを待って反撃し

戦闘が始まるのが普通だがおそっていったのはジンだった

あのでけーバスターソードを大振りしさっそく1体ぶったおした

ここから敵さんたちは切れていっきにおそってきた

「ジンなにやってんのよー！」カリアが叫ぶそう言いつつも剣を抜くカリアやるなあ

俺も遅れをとったものの中級剣を抜きおそってきたブランウルフを切り倒す

2体をたおしたところで思ったが俺に剣はなんかうまく合わないな・

ジンなんかはあの大剣で1撃でテンポ良く倒してるしカリアも隙を見てうまく使いこなしてる

俺は剣を地面に捨てて槍に変更したしかしこっちは逆にむずくなっ
たかも・・・

「アニーなにやってんの1番倒してないじゃない」カリアが叫ぶ

俺は一度捨てた剣を拾いまた使い始めた

もう残り4体といったところで気の抜けてたジンに後ろから1体おそってきた

ジンはきづいていない今走っていても少し追いつかないと思いポーチに手を入れ中から短刀

を出しておそってこようとするブランウルフめがけなげた

見事的中！動きを止まった所を剣で切り倒した

「うおお」ジンがびびった「助かったーサンキューアニー」

さっきの戦い方良かったかも。その後全滅させた俺たちはひとまず休憩

「俺6体もおしちまったぜ。しかしバスターソード振り回してたら肩がいたくなってきた

」まあ初心者の俺たちがあんだけ武器振り回してたんだからそうもなるだろうな

その後目的地につき鉱物の採取をはじめた

発掘用の道具を持ってきたんだが期待していたほど鉱物は取れなかった

取れた鉱物は普通の鉄と短剣が2本作れるほどの量の鋼とアメジストも少し出てきた

「時間的にもやばい頃だからそろそろでよっか」カリアが言い出して出て行くことに

もときた道をもどり入り口までもどるとすっかりあたりは暗くなつて完全な闇だった

これじゃ洞窟にいるのとかわんないな

「なあこれからまた半日かけてかえんのかよー少し休もうぜ腹減ったし」

「そうね。くんせい肉とサンドイッチ持ってきたから食べよノルンの手作りよ」

俺たちは洞窟の入り口に入り飯を食ってすこし休んでいたらそのまま寝てしまった

＊

うっつまぶしいな。外からの太陽の光が直接目に当たっていた

目の前には寒さしのぎに付けたたき火の後がカリアはしっかりと毛布にくるまって寝てるし

それに比べてジンは寒さにふるえながら険しい顔で寝ている。

「おい二人とも起きろよもう朝だぞ」目をこすりながら二人とも起き出したところでジンが

叫んだ

「おい何でテメーだけちゃっかり毛布くるまってンだよ」

「べつにいいじゃん用意してないあんたが悪いんじゃないの?」

「んだと」

「なにやる気?」

・ ・ ・

けんかを始めた二人を見て俺が止めてようやくレンドに向けて出発した

＊

「つ・・・疲れた」ようやくライフウェポンに到着してジンが一言はっし奥の部屋で寝始め

た

「お疲れさます。どうでしたか？」リーが話しかけてきた

「まあ取れたことは取れたんだけど俺の代2の目的が果たせなかったよ」

「自分にあった武器っすか？」「うん。短剣を投げて動きを止めて倒すってのはよかったけ

ど」

「へーよくそんな器用に戦えましたね。アニーさんはブーメランとか投げナイフとかどうす

か？」ブーメランか・・・なんか俺にあってそうだな。

「うん。じゃそれに賭けてみるか。あっそうだリーこれ何かわかるか？」

火陰洞窟でひろった赤く光る硬い物質をみせた

「・・・これ火陰洞窟でひろったんすよね・・・だとしたらもう行かないほうが良いです」

「えっなんで」 「これ灼熱竜の鱗っすよ。正真正銘のA級ドラゴンの鱗っす」

「マジで！」 隣で聞いてたカリアが叫んだ

「でもこの鱗使えばかなり良いブーメランが作れますよ」 「おお！んじゃあ作ってくれ」

すぐに俺が頼む「分かりました。」 おお俺のマイウエポンができんのが楽しみだ

そういやノルンに任せて置いた店の売り上げはどうなってるかな。

「ノルン売り上げはどうだった？」 「だめだよ。ぜんぜん売れなかった私がせっかくぶりっこ

になって接客して店にいれてもあんま売れなかったの」と奥の部屋から聞こえてきた

しかし・・・ぶりっこ？ノルンが？うーんあんま想像つかない。

まあとにかくこれからはリーの作るまともな剣を店に出して売り上げを取り戻そう！

「そーいやリーあの駄目な剣はどうしたの？」 カリアがきいている

「ああ、あれならまだ打ち直せるのは良くなおしましたし。もう駄目だと思ったのはみなさん

の専用武器の材料にしました。」

「ん？駄目だったやつを一から作り直せばよかったんじゃないの？うすればあたし等洞窟いか

なくてもよかったじゃん」

「自分たち専用の武器作れていったのはそっちでしょ。だから結局は材料が必要だったんす

よ」

「じゃあ頼まなきゃ行かなくてよかったてことじゃんかー！！」

3話：いざ火陰洞窟（後書き）

初の戦いシーン書きました次はもっとうまく書きたいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8397b/>

ようこそ！ライフ・ウェポンへ

2011年1月13日02時56分発行